

八幡浜トロール漁業の沿革

明治初期
手繰網と称する沿岸漁業が盛んになり、漁具の改善により打瀬網漁業に変化する

明治38年
矢野崎村(現向灘地区)で打瀬網漁業の全盛期を迎える(43隻)

明治40年
井上清吉氏(向灘)が下関よりトロール船を導入

大正7年
柳沢秋三郎氏(真穴)が機船手繰網漁業(1艘曳)を操業、多くの網元が機船漁業へ転換を図る(愛媛の機船底曳網漁業の始まりとなる)

大正11年
柳沢氏が機船2艘曳漁業を操業開始、萩森銀太郎氏がこれに続く

大正12年
向灘地区の打瀬網漁業者が機船底曳網漁業の許可申請をするも、愛媛県により不許可。このため、宮崎、高知、鹿児島他6県において許可を受ける

昭和2年
機船底曳網漁業40統から10統に整理

昭和8年
機船底曳網は36統となるもの、沿岸漁民との紛争も多く漁業取締は強化される

昭和14年
戦争のため漁船の徴用が始まる。「漁業報国」を合言葉に、南方での漁獲物は日本軍の食料として供給された

昭和19年
戦時中、食糧増産の国策の下、愛媛県に機船底曳網(7統14隻)が再び許可される

昭和21年
任意組合「愛媛県機船底曳網漁業組合」設立(組合長は魚本義若氏)

昭和23年
新たに20統の許可を受け27統54隻(隻数のピーク)となる

昭和39年
株式会社 栗之浦トック(八幡浜市)がはじめての鋼船のトロール船(50トン)を建造

昭和45年
愛媛県の沖合底曳網漁船、スタン方式船型となり省力化進む

昭和46年
海洋水産資源開発センターによる深海底曳網試験操業開始

昭和48年
9統18隻の操業(うち愛媛沖船籍は4統)

昭和55年
八幡浜魚市場の取扱量がピークをむかえる(47,751トン)

昭和60年
八幡浜魚市場の取扱金額がピークをむかえる(147億円)

平成9年
7統14隻の操業

平成13年
5統10隻が続くも漁獲資源減少とコスト高により減船が進む

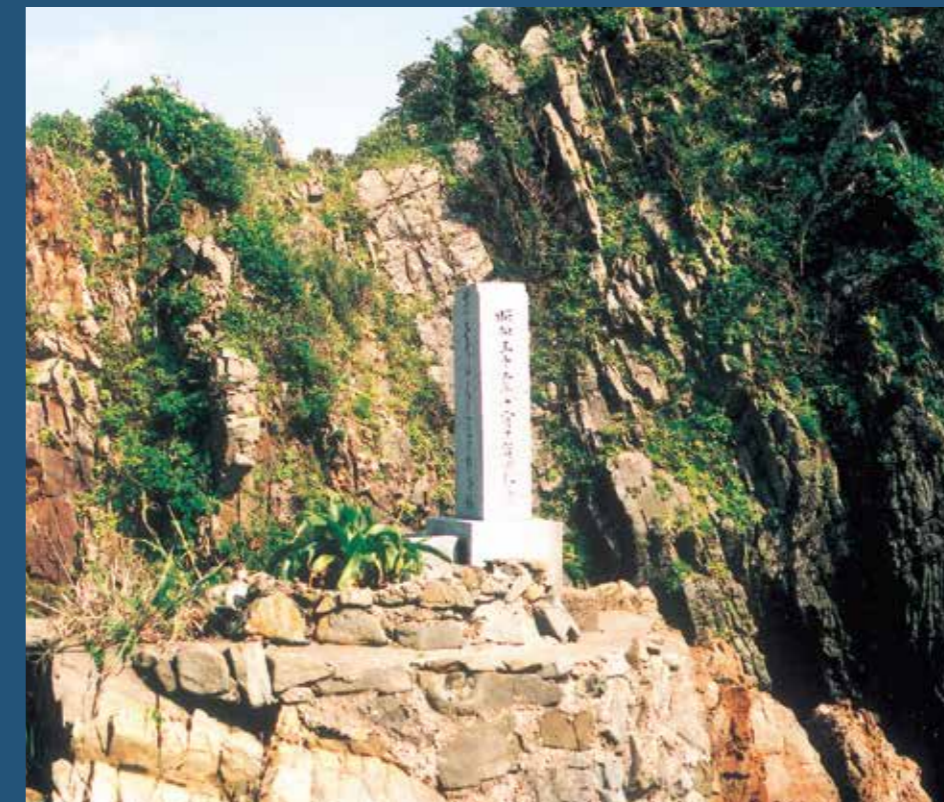
平成18年
9月からの操業は第15・16海幸丸のみとなり、現在に至る



昭和23年当時のトロール船「第1・第2天神丸」(各48.35トン/120馬力)



昭和25年頃のトロール船「第7・第8若宮丸」(各32.2トン/135馬力)



第二天洋丸遭難者供養塔(熊本県天草郡/昭和32年建立) 多くの苦難を乗り越え、トロール漁業の歴史が守られています



徳仁丸の進水・出漁を見送る家族(昭和43年)



進水を前にした徳仁丸と乗組員の皆さん



第25・第26海幸丸(昭和44年建造/各63トン/310馬力)



8月31日の出漁式。かつては八幡浜の夏の風物詩でした。



第35・第36海幸丸(各75.5トン)進水披露の様子(昭和51年7月)



第15・第16海幸丸(現有船/各125トン)進水披露の様子(平成元年7月)



海幸丸出漁の様子

